

1981年11月10日発行 共産主義者同盟 (RG) 第39号 200円 発行人 野村 忠

赤報

スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義復権の旗を更に高く掲げ、国際非合法党を建設せよ!

(三) 赤報論争論(狙撃兵論)

(1)

この一時代(一九六九一九七〇年)の党の軍事論は、戦略綱領主義に規定されて大體において静的なものであり、静態的な軍事組織論と主体的論がその上にあつたこと...

(四) 『革命戦争派の組織問題』批判』に関連して

(1)

同志の批判文書に關連して若干の見解を述べたい。 『批判』(a) (1) について、革命戦争を計画的・系統的に闘争する...

(四) 『革命戦争派の組織問題』批判』に関連して

(2)

『批判』(a) (2) について、革命戦争を計画的・系統的に闘争する。世界プロレタリア革命の立場から、安南戦争を革命戦争として闘争する...

『革命戦争派の組織問題』

総括討論(下)

改革(サークル主義、沼地主義との闘争)の必要が生れてきたが、赤報論争の当事者達は最近になって十分意識しておらず、またそのことによって、運動の観念(突撃兵)と主体性論が共有されている...

この時代(一九六九一九七〇年)の党の軍事論は、戦略綱領主義に規定されて大體において静的なものであり、静態的な軍事組織論と主体的論がその上にあつたこと...

狙撃兵の「自己への問い返し」は断絶なく、自己への問い返しは断絶なく、「上」にある党への下駄を預け、自己の主体的問題に専ら取り組むことである...

『革命戦争派の組織問題』批判』に関連して同志の批判文書に關連して若干の見解を述べたい。 『批判』(a) (1) について、革命戦争を計画的・系統的に闘争する...

改革(サークル主義、沼地主義との闘争)の必要が生れてきたが、赤報論争の当事者達は最近になって十分意識しておらず、またそのことによって、運動の観念(突撃兵)と主体性論が共有されている...

れ、トロツキーの理論が紹介されてきたこと、その後の展開が、後に共産主義者同盟を結成した学生党員たちは五七年以来、第一に党中央が提起した草案案にある日本の従属国規定にもついていた人民民主主義革命路線に反対し、第二に党中央に対する最大の反対派であり、後の構造改革派を形成

(四) ブンドの世界認識

共産主義者同盟の世界認識を明らかにするために、同盟結成以前の党内闘争時代の文獻をとりあげる必要がある。

党内闘争時代の文獻のうち、党内闘争に質的転換を与えたのが五八年一月に発行された大衆闘争機関誌「マルクスレーニン主義」九号に掲載された「十月革命の道とわれわれの道」(いわゆる山口論文)であった。

山口論文は、国際共産主義運動の歴史的教育をスターリン神話を打破することによって明らかにしようとしたものであった。この論文は草案案発表後共産党の内部でひろげられた綱領論争の枠組みそのものがスターリン神話によってかたづけられていたことを暴露し、その枠組みなかでの論争を拒否し、これを打破することにもついで、マルクスレーニン主義を復権しようとしたものであった。

この論文の基本的立場はトロツキーの理論によってスターリン主義批判の眼を開かされたが、トロツキー主義とは一線を画し、スターリン主義を批判してマルクスレーニン主義を復権しようとするところであった。

例えば山口論文の中心テーマの一つは労働農民独裁論の批判であるが、トロツキストにとっては組織論の分野ではトロツキーに弱点があったが戦略論の分野ではレーニンの方が一七年四月にトロツキーの永続革命論に歩みよった、というものが基本的な主張であったが、山口論文はレーニンの労働農民独裁論のスターリン主義的解釈を批判しつつ同時にこのようにトロツキストの主張を退け、労働農民独裁論と四月テーゼとの関連を明らかにすることによって

革命論の原則を現実的に破棄することによって、階級対立を階級制の平和的共存戦略にすりかえていくことの中に示されている。現代世界の『構造変化』なる規定によって彼は政策的な破綻を規定し、革命の国際的性質を無視抹殺し各国プロレタリア革命を無視し、革命的な破綻を正当化するのである。(同前、八五頁)。

第二は平和共存政策批判は単なる革命戦略への批判にとどめられず、ソ連の官僚体制批判にまで進められている。「ブルジョアは大衆の圧力を利用してモロトフを追放した」といふ見地から一段階革命戦略を批判してプロレタリア国際主義を強調したこと、他方で人民戦線戦術の公式的あてはめを試みるのも二段階革命戦略の信奉者と同様の誤りをおかしていることを主張し、党中央及び反対派を共に批判したものであった。

六・一事件によって党内闘争から分派闘争へと進むことを余儀なくされた段階では、党中央及び社会主義革命派に対する批判はより全面的なものとなっていた。五八年九月に発行された「プロレタリア通信」一号では草案案の誤りを、第一に世界革命の展望の完全な欠陥を特徴として、……「プロレタリア世界革命の第一環として、現代における革命は実現されるといふ基本的な展望をそれは全く欠いていることである」(E、特増号、八〇一頁)と批判して、「世界プロレタリア革命と日本におけるプロレタリア独裁樹立の戦略によって、革命的階級の理論的武装を強化すること」(同前、八三頁)を提起し、「国際的運動の教訓を科学的に採り、その革命的伝統を継承する立場に立つて、マルクス主義理論の創造的活動を展開しなければならぬ」(同前、八四頁)という見地から次のような世界認識を述べている。

第一は平和共存政策、ブルジョア・トリアッチ路線への批判である。「今日におけるブルジョアの反革命的な性格は、マルクス主義

革命論の原則を現実的に破棄することによって、階級対立を階級制の平和的共存戦略にすりかえていくことの中に示されている。現代世界の『構造変化』なる規定によって彼は政策的な破綻を規定し、革命の国際的性質を無視抹殺し各国プロレタリア革命を無視し、革命的な破綻を正当化するのである。(同前、八五頁)。

第二章 日本帝国主義の評価 (一) 日帝復活・自立論争の意義

六全協以後、五一年綱領とこの路線を「実証」しようとして書かれた「日本資本主義講座」で示されたアメリカ帝国主義に対する日本の植民地的従属という見解に対する批判がさかんになされるようになった。

サンフランシスコ条約以後の日本を帝国主義的復活と自立の過程にあるものとして対米従属論を批判したのは小野賢彦や内田稔吉らであったが、日本共産党中央はこれらの論者の帝国主義復活・自立

に、ブルジョア独裁に対する最後の決戦の日が迫りつつあることをいませよ、今日の世界資本主義の破局を準備し、階級支配の根本的矛盾をすすんでくぐり出す一連の事態は進行している。とりわけ一九五七年以来アメリカにはじまっている資本主義の停滞と恐慌の徴候は、資本主義の根本矛盾の爆発にみちびく方向に展開しつつある。恐慌の重荷を完全に押しつけたブルジョアは、たまたび左翼化の方向をえらぼうとして、ソ連の官僚体制批判にまで進められた。ブルジョアは世界を洗っている。(同前、八六頁)

第四は革命的プロレタリアートの任務である。「すべての政治的、経済的、軍事的な現実の進展は、平和共存と社会主義の進歩、労働者国家に於ける官僚体制の維持のための消極的な現状維持の政策の破綻をますます明白にすると共に、新たな進歩の入口に立っている帝国主義に決定的な強力な打撃を加え、プロレタリアの打倒とプロレタリア独裁の實現のために最もすみやかに世界のプロレタリアートを駆起させることである」(同前、八六頁)

第五はこれら、国際共産主義運動の裏切りが、帝国主義の危機を救った。(同前、八六頁)この確認の上で資本主義の危機とプロレタリア革命の展望の提起で

論に反対し、すでにみたとおり、草案案では日本をなにかは占領された被抑圧国であると主張したものであった。

この規定は党がどのような革命路線を定めるかということに極めて密接に関連しており、従って草案案公表以後六一年に綱領が決定されるまでこの規定をめぐってはいくつかの論争がくりひろげられたのであった。ここでは日共内部の論争についてはふれないが、綱領決定以後今日までの二〇年間の日

ブルジョア議院政へとたらくしてしまつた日共第一派は、綱領の規定のなすくずしの変更ににもかかわらず、今日でも半占領規定に固執し、日本帝国主義の復活・自立を否定し、日本ブルジョアの民族自決権が侵害されていると主張して日本帝国主義の他民族に左から手を貸している。半占領規定にもつづく人民民主主義革命路線が二〇年間の実践によって実情に合ったものではないことが明らかとなったこと、この規定は社会主義革命に対する日和見主義を表明したものに他ならなかつたこと、このことを容れずとめ、そして日本帝国主義の復活・自立を容れずとめ、今日における日共第一派と人民民主主義革命派との理論闘争、今日における日共第一派と人民民主主義革命派との理論闘争を激化させる。(E、特増号、九五頁)

以上簡単に述べたことから明らかのように、日本帝国主義復活論争の検討は日共第一派の日和見主義から社会主義の転落の秘密を暴くものとしての意義をもつていなければならない。この見地から思想闘争、理論闘争が不十分になされてはならない。このことの原因の大半は、日共第一派を批判した反日共諸派が個々の点では正しい批判をしながらも全体的な世界認識において正しい見解を十分にあげることができていないことにある。

従つてブンドの日本帝国主義復活・自立論を検討する際にもこのことを念頭におき、今日における日共第一派との理論闘争、党派闘争の武器をつくりあげるといふ見地からなされなければならないこととなる。

「資本主義世界はその矛盾を刻々深め、巨大な破綻にむかいつつある。第二次大戦以来の本格的な資本の闘い、世界規模の規模ではじまりつつある。利潤を求めてあつた資本の拡大する資本の運動は、帝国主義諸国の対立を深めつつ、全世界的な恐慌の条件をつくりだしている」(E、一五、一五〇頁)

「そして世界市場の統一性、循環の国際性の回復は、恐慌が世界恐慌として発現する前提条件を成熟させた。一度、危機が開始され、世界市場が縮小に向つ時、嚴重な貿易管理、帝国主義的関税政策による国内市場の保護、独占価格の維持、これらによる海外市場への進出としてブロック化は一斉に進行するのである。すでに再生過程に深く介入した国家は資本の意志と一体となつて帝国主義的進出の前面に立ちかかっている」(E、二、一五四頁)

このように見ると、一九九〇年の世界恐慌から第二次世界大戦にいたる過程を単純にあてはめて展望を描き出したものがあるが、これは妥当なものではなかつた。従つてこの「日本見通し」を一体となつてブンドの日本帝国主義復活・自立論について検討しておくことが必要である。

積が不可欠となり、のみならず国際的にも種々の機構によって、たとえばIMF、世銀、共同市場等、資本の流通、集積を組織化しようとする。同時にブルジョアは単なる資本制生産の一層の組織化としてのみならず全世界の階級化を激化する労働者階級の闘争を徹底的に抑圧し、もっとも有効に、もっともやすあがり搾取するために軍事同盟を結成するのである」(E、二、九六頁)と説明した。

(I) ブンドの日帝自立論

日本帝国主義の復活・自立論については、ブンド結成直前に発行された「プロレタリア通信」号で次のように述べられている。

「日米協力のあいだの利害の一致」は協力の側面はなにも戦後にかきず、日本の独占が軍国主義と緊密に野合し、とくに排外的な傾向を露骨にもつていた戦前の時代にも存在していた。世界的な力関係および米日独占間の力関係が激化した戦後の時期に、その側面は拡大され、疑いもなく重要性をました。帝国主義体制そのものの弱体化という条件下で、強化する社会主義と反帝国主義諸民族の勢力および強大化した労働運動と一般民主主義への対抗という帝国主義に共通の利害が規定された。このことを見ないのは、ちろん盲目である。同時に、第二次大戦をつうじて極度にまで進行した帝国主義の不均等発展の強化が、日米関係をよみていっさいの帝国主義相互間の矛盾を一段とつよめ、その間の共通の利害の同盟関係をたえまなく動揺させ、ひききいてる作用を忘れるのは、いっさい盲目的であろう。『戦後日本資本主義論』青木書店 九三頁

このように小野の誤りの原因は第一に帝国主義を世界体制として捉える視座に欠けていること。その結果第二に不均等発展の法則の貫徹形態を把握することに失敗していること。に求められよう。すでに『赤報』三七号「スターリンの帝国主義認識の批判」で明らかにしておいたように、レーニンが帝国主義論の関係を先天的に矛盾したものと捉えていた。小野は次のように述べていた。

「日米独占のあいだの利害の一致」は協力の側面はなにも戦後にかきず、日本の独占が軍国主義と緊密に野合し、とくに排外的な傾向を露骨にもつていた戦前の時代にも存在していた。世界的な力関係および米日独占間の力関係が激化した戦後の時期に、その側面は拡大され、疑いもなく重要性をました。帝国主義体制そのものの弱体化という条件下で、強化する社会主義と反帝国主義諸民族の勢力および強大化した労働運動と一般民主主義への対抗という帝国主義に共通の利害が規定された。このことを見ないのは、ちろん盲目である。同時に、第二次大戦をつうじて極度にまで進行した帝国主義の不均等発展の強化が、日米関係をよみていっさいの帝国主義相互間の矛盾を一段とつよめ、その間の共通の利害の同盟関係をたえまなく動揺させ、ひききいてる作用を忘れるのは、いっさい盲目的であろう。『戦後日本資本主義論』青木書店 九三頁

今日の過渡期社会の階級闘争と結合したプロレタリアートの国際階級闘争の指針を導き出すためには、過渡期世界(現代世界)における階級闘争の性格を明らかにするために、帝国主義の世界再分割闘争の中心にアメリカ(集中)されているという事実の環をなしている。『沢村 織田「日本共産党批判」六八頁』こと、したがって日米間の利害が対立し爆発点を導くまで「アメリカ帝国主義」の従属をまねがれることはありえない。(同前 六八頁)という見解はどうか。

この見解は日米関係を「アメリカ帝国主義と日本帝国主義は相互に対立をもちながらも中国革命と植民地革命に対し特にならず第一に日本革命に対し根本的に対立して手を握り合っている。彼らは絶えず相互に闘争しながらこの基本的に対立する国際階級闘争における同盟者として、常にその調整と戦略的調整を行わねばならない」(西京司「日本トロツキズム運動の形成」一四一頁)と見るのであるが、この見解は日米両帝国主義の対立よりも同盟を基本とするものである。このことは過渡期社会の成立によって帝国主義の本質が変容したという見解にゆきつづいて、日共と同様に体制間の矛盾を帝国主義の法則よりも主要なものと捉えていることになるのである。

この見解は中核派にもひきつがれており、七〇年安保闘争に際して本多延嘉は「日本帝国主義が帝国主義として延命していくために、帝国主義諸国間の矛盾をも擬制的に統制して、アメリカ帝国主義の世界支配のうちに自己の命運を一体化しつづける(『勝利にむかひの試練』二二四頁)と述べているが、これは単なる現象論であって、このように認識ももつて正しき戦術を導くことはできない。(今日では中核派はアメリカ帝国主義の没落と帝国主義諸国間の矛盾の没落を強調している。これに対して第四インターは日米反革命同盟を強調して対立については注目していない。とはいえども従属論を捨ててきている点では共通している。

今日の見解は誤っていた。だがそれは世界再分割の必然性という見地から分析したことが誤っていたことを意味してはいない。この必然性を事実として明らかにできなかったことにはあつたのである。従って事実として世界再分割の必然性を明らかにすることに、プロレタリアートの国際階級闘争の指針を導き出すためには、過渡期世界(現代世界)における階級闘争の性格を明らかにするために、帝国主義の世界再分割闘争の中心にアメリカ(集中)されているという事実の環をなしている。『沢村 織田「日本共産党批判」六八頁』こと、したがって日米間の利害が対立し爆発点を導くまで「アメリカ帝国主義」の従属をまねがれることはありえない。(同前 六八頁)という見解はどうか。

この見解は日米関係を「アメリカ帝国主義と日本帝国主義は相互に対立をもちながらも中国革命と植民地革命に対し特にならず第一に日本革命に対し根本的に対立して手を握り合っている。彼らは絶えず相互に闘争しながらこの基本的に対立する国際階級闘争における同盟者として、常にその調整と戦略的調整を行わねばならない」(西京司「日本トロツキズム運動の形成」一四一頁)と見るのであるが、この見解は日米両帝国主義の対立よりも同盟を基本とするものである。このことは過渡期社会の成立によって帝国主義の本質が変容したという見解にゆきつづいて、日共と同様に体制間の矛盾を帝国主義の法則よりも主要なものと捉えていることになるのである。

この見解は日米関係を「アメリカ帝国主義と日本帝国主義は相互に対立をもちながらも中国革命と植民地革命に対し特にならず第一に日本革命に対し根本的に対立して手を握り合っている。彼らは絶えず相互に闘争しながらこの基本的に対立する国際階級闘争における同盟者として、常にその調整と戦略的調整を行わねばならない」(西京司「日本トロツキズム運動の形成」一四一頁)と見るのであるが、この見解は日米両帝国主義の対立よりも同盟を基本とするものである。このことは過渡期社会の成立によって帝国主義の本質が変容したという見解にゆきつづいて、日共と同様に体制間の矛盾を帝国主義の法則よりも主要なものと捉えていることになるのである。

この見解は日米関係を「アメリカ帝国主義と日本帝国主義は相互に対立をもちながらも中国革命と植民地革命に対し特にならず第一に日本革命に対し根本的に対立して手を握り合っている。彼らは絶えず相互に闘争しながらこの基本的に対立する国際階級闘争における同盟者として、常にその調整と戦略的調整を行わねばならない」(西京司「日本トロツキズム運動の形成」一四一頁)と見るのであるが、この見解は日米両帝国主義の対立よりも同盟を基本とするものである。このことは過渡期社会の成立によって帝国主義の本質が変容したという見解にゆきつづいて、日共と同様に体制間の矛盾を帝国主義の法則よりも主要なものと捉えていることになるのである。

この見解は日米関係を「アメリカ帝国主義と日本帝国主義は相互に対立をもちながらも中国革命と植民地革命に対し特にならず第一に日本革命に対し根本的に対立して手を握り合っている。彼らは絶えず相互に闘争しながらこの基本的に対立する国際階級闘争における同盟者として、常にその調整と戦略的調整を行わねばならない」(西京司「日本トロツキズム運動の形成」一四一頁)と見るのであるが、この見解は日米両帝国主義の対立よりも同盟を基本とするものである。このことは過渡期社会の成立によって帝国主義の本質が変容したという見解にゆきつづいて、日共と同様に体制間の矛盾を帝国主義の法則よりも主要なものと捉えていることになるのである。

この見解は日米関係を「アメリカ帝国主義と日本帝国主義は相互に対立をもちながらも中国革命と植民地革命に対し特にならず第一に日本革命に対し根本的に対立して手を握り合っている。彼らは絶えず相互に闘争しながらこの基本的に対立する国際階級闘争における同盟者として、常にその調整と戦略的調整を行わねばならない」(西京司「日本トロツキズム運動の形成」一四一頁)と見るのであるが、この見解は日米両帝国主義の対立よりも同盟を基本とするものである。このことは過渡期社会の成立によって帝国主義の本質が変容したという見解にゆきつづいて、日共と同様に体制間の矛盾を帝国主義の法則よりも主要なものと捉えていることになるのである。

RG資料集 共産主義 17号

スターリンの理論上の誤謬についての要綱

はじめに

スターリン主義とは何か、という問題についてのわれわれの見解を明らかにする前に、ソ連・中国両共産党のスターリン批判を見ておこう。ソ連共産党二〇回大会でフルシチョフは秘密報告を行い、党指導部として最初のスターリン批判を提起した。その批判の内容は主としてキエフ暗殺を口火とした粛清と個人崇拜を誤りとするものであった。フルシチョフ報告ではこれらの誤りは、主としてスターリンの個人的資質のせいとされていた。従ってこのスターリン批判は、スターリン体制の批判へと至らず、その部分的な手直しをもちたに過ぎなかった。すなわち、スターリンに直屬し党中央委員を超越していた秘密警察を党中央委員会の下に從属させたこと、これがフルシチョフによってなされた政治体制上の変革のポイントであった。

このフルシチョフのスターリン批判と改革の基礎は、どこにあったのだろうか。それは、スターリン治下において実権官階層を階級に転化するために用いられた暴力的手段が、フルシチョフ時代にあっては階級に形成されてしまった官階層にあっては、時代つまり自らを支配階級として維持していくためには、暴力的手段としてよりも経済的方法が主要な統治のための手段となっていたのであった。

そういうわけでスターリン批判を粛清と個人崇拜といった問題にとどめておけば、官階層の支配をゆるがせるのではなく、スターリン主義を本当に批判し克服することにほならないのである。中国共産党は文化大革命の時期に、七分は正しく三分は誤りがあったというスターリン評価を明らかにした。その誤りには粛清や個人崇拜の問題の他に、ソ連で採取された階級が消滅したという判断がとりあげられ、これが過渡期階級闘争の否定として批判された。しかし七分は正しく三分は誤り。しかし評価を支持するわけにはいかない。ではスターリン主義とは何か。それは党と国家権力を握っている官階層が、過渡期の国家的所有を

歪曲し、プロレタリアート独裁を解体して自らを階級へと形成していくことを推進したイデオロギーである。それは歪曲された国家的所有を手段としてプロレタリアートを支配している官階層の立場を代表している。官階層の階級への転化はスターリン治下においてなされたが、スターリンの理論には十月革命以前のものであり、それ以後プロレタリアート独裁を解体し、官階層が支配した時期のもの、官階層が支配階級に転化して以降のものがある。スターリン主義をこのように見ると、フルシチョフの場合には中期スターリンの行きすぎた批判することを意図したもので、官階層の支配を廃絶することなどは目指されていなかったことがわかる。また中国共産党の毛沢東派の場合には後期スターリンの理論を批判しながらも、初期及び中期のスターリンの理論を基本的に正しいものとみなすことにより、官階層の階級打倒のための理論的立場を首尾一貫して形成することができなかつた。これは毛沢東派がフルシチョフのスターリン批判を資本主義復活のためのクーデターとみなし、このクーデターに後期スターリンの理論が論拠を与えたといった形でスターリン批判を行なったことによるが、ソ連での資本主義の復活という認識が誤っていたのであった。この誤りに制約されて毛沢東派は官階層打倒といった問題意識を放棄せざるを得ない。その結果、文化大革命で奪権しながらも、革命を正しく指導することには失敗したのである。

歪曲し、プロレタリアート独裁を

たことがわかる。官階層は一貫して自らのイデオロギーがマルクス・レーニン主義の正当な継承にもつとものであると主張してきた。官階層に反対する反体制派にあつても、この官階層のイデオロギー攻撃に對抗することができていない。この官階層が造った神話が打ち破られない限り、官階層打倒の闘争はプロレタリアート独裁を復活することにはつながらない。従ってスターリンの理論がマルクス・レーニン主義の革命理論とは異質なものであることを完全に立証することは極めて重要な課題なのである。

われわれはこの課題を果したために系統的な作業を行なってきたが、ここでそれらの作業をふまえて、スターリンの理論上の誤りを年代順に列記しておくことにしよう。なおスターリンの理論上の誤りについての諸国共産党の公式見解の他に、メドヴェージェフが著した『ソ連の歴史』第一巻の「ソ連で行われたスターリン理論の批判」と題した文章を、また毛沢東は文革中に紅衛兵の間で読まれた『毛沢東思想方針』でスターリンの誤りに再三言及している。

(A) 初期スターリン

十月革命までの時期の初期スターリンの理論には、すでに官階層の代表者として、それを階級へと転化していった中期スターリンの顔がのぞいている。スターリンが自分の全集を編集するにあたり、初期の論文を修正したかもしれないが、これは現在のわれわれにはたしかめようがないので考慮の外におこう。

(1) 共産主義的政治的歪曲

中期スターリンが党内の官階層を強化し、プロレタリアート独裁を解体していったのは、彼が共産主義的政治をわきまえておらず、ツァーリ的・ブルジョア的な政治と同様なものを持っていたことによるものであった。このような政治的歪曲はレーニンが何をなすべきか、で提起したプロレタリアートに対する共産主義的政治教育を、スターリンが党内の意見の相違について簡単に「擁護したとき」にすでにその萌芽があらわれている。レーニンは政治的煽動によってプロレタリアートを自主的な行動へと立ち上らせることをおとし、プロレタリアートに共産主義的な政治教育を行つたことは、レーニン主義の理論とは異質なものである。そしてソ連共産党をはじめとして文革期の中国共産党にいたるまで、このマルクス・レーニン主義の理論とは異質なスターリンの理論をよりどころにして

的矛盾を対立物の統一として把握するというマルクス・レーニン主義の立場からすれば、ブルジョアジーとプロレタリアートの間の階級闘争は、資本と賃労働という対立物が統一された資本主義の生産様式の経済的運動法則にもついても説明されるべきものであるが、スターリンの弁証法からすれば、このような作業は不必要なものになつてしまつたのである。こうした世界観に従えば、個別科学は不要となるだろう。

(3) 資本主義批判の歪曲

スターリンの「弁証法」的世界観は、古いものと新しいものととの闘争における新しいものの勝利というところであつたから、資本主義の分析と批判は、プロレタリアートの解放闘争の目標と手段を明らかにするものと位置づけられてはいない。なぜなら彼の世界観によれば、プロレタリアートの勝利は自明のことであつたから、従つてスターリンは、マルクス・エンゲルスの資本主義批判を受け入れるにあつて、それを資本主義による労働者の搾取の仕組みを解明し、この社会に貧富が対立している原因を示すということ以上には出ることがなかつた。だからスターリンはマルクスがある「弁証法的唯物論と史的唯物論」であり、この本には後述するように多くの誤りがある。ところがこの本で述べられている弁証法についての根本的命題が、すでに初期の「無政府主義がマルクス主義か」に見られる。

(2) 弁証法の歪曲

スターリンの哲学上の著作として悪名高いものは、後期の著作である『弁証法的唯物論と史的唯物論』であり、この本には後述するように多くの誤りがある。ところがこの本で述べられている弁証法についての根本的命題が、すでに初期の「無政府主義がマルクス主義か」に見られる。

(B) 中期スターリン

初期スターリンの理論にあつてマルクス・レーニン主義と異質なもの、世界観と政治思想にあつた。これはまだ萌芽的なものであつたが、十月革命後の内戦の過程で、スターリンは自らの世界観と政治思想に対する支持者達を見出すようになっていった。この初期の理想主義的な時期が去つたあと、ソビエト権力は列強の干渉と内戦に直面して、一たんは粉砕したツァーリの国家機関と官僚制及びブルジョア専門家を利用しなければならなくなり、ソビエト権力の官階層の歪曲が発生していったからである。

スターリンの政治思想上の誤りは、レーニンの指導の下に書かれた「マルクス主義と民族問題」にも顔を出している。レーニンはロシア社会民主主義の綱領にある民族自決権を分離の自由という意味でのみ使用すべきとし、民族自決権の誤りには「民族自決権」として、スターリンは民族自決権をプロレタリアートの階級闘争の利益に従属させることを強調したのに対して、スターリンはプロレタリアートの綱領の正確な意味に従属させると主張したことが重なる。スターリンはレーニンの民族自決権を事実上否定する萌芽をこの時期にすでに持っていた。

(4) 民族自決権の歪曲

この誤りの上にさらにレーニンが民族自決権をプロレタリアートの階級闘争の利益に従属させることを強調したのに対して、スターリンはプロレタリアートの綱領の正確な意味に従属させると主張したことが重なる。スターリンはレーニンの民族自決権を事実上否定する萌芽をこの時期にすでに持っていた。

(5) 大ロシア的排外主義

内戦終結時にソ連邦の結成が課題となつたとき、スターリンは辺境地方の分離運動や民族的要求を反動的だとして抑圧し、ソ連邦への統合を急いだ。これはプロレタリアートの綱領の正確な意味に従つて民族自決権を評価するとして、従つてスターリンの立場から必然的に生れてくるものであつた。ところが昨日までツァーリの大ロシア的排外主義が猛威をふるつた辺境地方の分離運動を考慮すれば、ソ連邦の結成が言葉の上ではプロレタリアートの綱領の正確な意味に合致していったとしても、統合を急ぐことはツァーリの大ロシア的排外主義をひきつくととなり、プロレタリアートの階級闘争に分裂をもたらすことにならざるを得ない。もちろん辺境地方の分離運動にはブルジョアジーの影響もあり、統合が遅れることは、ロシアの政治的歪曲にもつとものである。

(6) 革命運動観の誤り

内戦の時期に急増した党員を教育する必要からスターリンは学習会用の講義を試みている。この種の講義案はいくつか残されているが、これらをまとめる過程でスターリン主義が体系化されていったのである。レーニン主義の基礎はスターリン主義を体系化したものとして悪名が高いが、この講義に先だつてなされた「ロシア共産主義者の戦略と戦術の問題」によつて「をみれば、スターリンの理論と革命観を次のようにまとめることができる。

第一は、運動の客観的過程を分析してその発展過程を明らかにすることが理論の役割であることとされる。第二は、理論によって運動の客観的過程が明らかにされれば、それにもつて戦略と戦術を決定し、これらをもつて運動の主観的要素に動きかけ、運動をはやめたりおくらせたりすることができることとされる。

(7) プロレタリアート独裁論の誤り

スターリンはプロレタリアートの独裁を国家機関であると捉えている。マルクス・レーニン主義の見地からすれば、プロレタリアート家はプロレタリアート独裁のための道具であり機関であるということなのであるが、スターリンのようにプロレタリアート独裁をプロレタリアート国家機関のこととするので、プロレタリアートの階級支配が国家機関による統治に解消されることになる。

論とそれに導かれる戦略戦術の正しさにあつては明らかである。以上の内容から明らかにすることは、スターリンが革命理論を初等数学の公式の応用で問題を解決する作業の如く組み立てて、この応用術を戦略戦術と規定していることである。ここには公式は問題解決の作業に影響を与えるが、後者は前者には影響を与えない、という前提がおかれている。だがプロレタリアートの運動の場合には、運動によって影響を与えられないような革命理論はあり得ない。問題解決の作業、公式の応用自体が、公式そのものが生みだされた条件を壊してしまうのである。それゆえ、スターリンのようにプロレタリアートの意志とはかかわりのない客観的過程の認識を理論とみなし、この理論をもつて戦略戦術を組み立てて運動の主観的要素に動きかけ、運動をはやめたりおくらせたり、実践に害毒を流すことはあつてもそれを助けたりはしないのである。

(8) 官僚制的 党組織論

スターリンにあっては党はプロレタリア独裁の手段とされて...

(10) 一国社会主義論

一國で完全な社会主義社会を建設できる、という一国社会主義論...

(C) 後期スターリン

一九三四年の一九七回大会前後に今日のソ連の経済構造が完成された...

(12) 弁証法的唯物論と史的唯物論

歴史偽造にみちた『ソ連邦共産党の歴史小教程』の二節と二書...

(13) 生産関係が生産力に照応する という法則

スターリンは、社会の発展法則を生産力の変化と発展に照応して...

(14) 社会主義社会でも死滅しない国家

一國社会主義論をとらえた時期にはまだスターリンは社会主義社会には階級はなく、従って国家も...

(16) 資本主義の基本的価値法則は剰余価値法則

スターリンは資本主義の基本的価値法則は剰余価値法則ではなくて剰余価値法則だといふ。なぜなら剰余価値法則は資本主義が生産する...

(15) 社会主義の下での商品生産論

スターリンは社会主義の下でも商品生産と価値法則が残存する根拠として、ソ連に存在している...

(17) 全般的危機の深化論

全般的危機論とは、すでに世界資本主義の相対的安定が確認されていた...

おわりに

以上の七項目は、スターリンがおかれた理論上の誤りの主なものについてあげたものである...

文献

- (a) スターリンの著作は一九〇一年から一九三四年一月までのもの...

命題 田畑書店

- (6) 『スターリン全集』五巻、二〇三頁「ソ連における階級の形成」...

「八面から続く」
今われわれが直面している状況は...

かかっているのだ。このために、
アメリカの黒人の闘争は階級闘争に...

然と行なうが、大部分の党員は
ニュートンのクリーパーにその指...

とにか、ニュートンは米帝の
ジェノサイド攻撃にたいして黒人...

冬期一時金カンパの要請
RGII政治軍隊を堅持した非...

き、アメリカ共産党などの修正主
義と闘うことが出来ることを明ら...

「われわれ人民は人種主義とファ
シズムの横行により、皆殺しの脅...

その間の事情をふりかえってみ
よ。六九年末から七〇年はじめ...

クリーパーが一九七〇年はじめ
白人プロレタリアートの革命闘争...

クリーパーの路線は、国際根拠
地路線の傾向をもつものであり、...

(4) 党の分裂

(a) 簡単な事実経過

党の分裂は、静かにはじ
まった。つい先日まで党の英雄と...

これは、解放後の活動の軸に
なり、かつ党の分裂を規定してい...

クリーパーは米帝の残虐な弾圧攻撃に
対して、黒人闘争を白人闘争と...

クリーパーは軍事路線をほしめ
るにあって、軍事目標を確定す...

(b) 対立の軸は
ニュートン対クリーパー

この対立の軸はニュートン対
クリーパーである。もちろんこの...

他にもジョージ・ジャクソンら
この分裂にかんじて態度表明を公...

白人プロレタリアートの革命闘争
の立ち遅れに対して「階級闘争...

クリーパーは軍事路線をほしめ
るにあって、軍事目標を確定す...

(5) 結び

党の分裂以降のBPPは逆手を
きめられた敗者のように、もはや...

黒豹党の教訓について (1)

まえがき

ブラック・パンサー党(黒豹党)は、一九八〇年九月にその機関誌「ブラック・パンサー」の停刊を告げられた。BPPの歴史を振り返ると、一九六六年から一九七〇年にかけての革命運動のなかで、最も注目された党派の一つとして、遂にその全国的な政治的勢力を喪失した。一九八一年一月七日号「ガーディア」で「ブラック・パンサー」はBPPの歴史の総括を試みて「インパクト」二号に掲載された。しかし、これはまったく日和見主義的で清算主義的なものである。

(1) 十項目綱領

一九六〇年代後半から七〇年代前半にかけての黒豹党の歴史を振り返ると、この綱領を制定するに際して、重要な経験がなされたとされている。この綱領は、国際的な革命家の理論を形成して問題を検討するのと緊密な関連性を持っている。これを強固に感じることが、何故ならば、BPPの崩壊はBPPだけの問題ではなく、六〇年代後半の世界の階級闘争の昂揚の問題でもある。そのなかでBPPは独自の地位を占めたのである。それをふまえてBPPの崩壊を語っても意味があるとは、いえない。

F・イーラムにおいては、このように視点が欠如しているため、BPPの結成の意義を評価しつづけてきた。限定的なものであり、当時の階級闘争、とりわけ国際的階級闘争のなかで占める位置を明確にしなくてはならない。表面的なものととらえている。

ブラック・パンサーとしてBPPの興隆は、ベトナム民族解放闘争、中国文化大革命、パレスチナ解放闘争等の国際情勢とアメリカの階級闘争の歴史に由来する。BPPの結成の意義とは、黒人独自の組織として反帝国主義、反資本主義、ベトナム反戦をかかげて黒人コミュニティ防衛をかかげたことである。これは、黒人コミュニティを帝国主義国内植民地として規定し、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放闘争と同様の闘争を国内において組

関する意義を隠蔽しようとしている。この「インパクト」紙目録、強烈な分派闘争を経てきたのであるが、イーラムは「この時期における闘争を『冒険主義的誤り』の一言で片付けようとしている。

清算主義によれば、国際帝国主義の中心たるアメリカ帝国主義における階級闘争の前進は望むべくもない。BPPと多かれ少なかれ同様の経緯を辿る革命戦争派がこぼれているのを見ると、われわれはBPPのつぎの課題を明らかにし、世界革命の前進のため、BPPの歴史を振り返らなければならない。

(2) SNCCとの合体

一九六七年の五月のサクラメント武装デモを機に、BPPの名は全国的に知られるようになった。アメリカの黒人コミュニティに脅威をおよぼすとともに、黒人にも大きな反響をあたえた。一九六七年五月から六月にかけて、一方六八年一月に合体した。

(a) 地方組織から全国組織へ

一九六七年の五月のサクラメント武装デモを機に、BPPの名は全国的に知られるようになった。アメリカの黒人コミュニティに脅威をおよぼすとともに、黒人にも大きな反響をあたえた。一九六七年五月から六月にかけて、一方六八年一月に合体した。

これにたいするBPPの対応は、ニュート・クリーパーとは微妙な違いをみせている。このときBPPは白人の既成指導者を拒否し、黒人の解放は黒人自身の事業であることを明らかにした。そして黒人コミュニティをベトナムの国内植民地と規定し、彼らに民族解放闘争と位置づけられることにより、黒人自身に提言をあたえた。この提言をもとに、武装の問題を提出し、黒人の解放は黒人が自ら進んで進めなければならないことを明らかにした。BPPは黒人自身の手で進めなければならないことを明らかにした。

それをたいするBPPの対応は、ニュート・クリーパーとは微妙な違いをみせている。このときBPPは白人の既成指導者を拒否し、黒人の解放は黒人自身の事業であることを明らかにした。そして黒人コミュニティをベトナムの国内植民地と規定し、彼らに民族解放闘争と位置づけられることにより、黒人自身に提言をあたえた。この提言をもとに、武装の問題を提出し、黒人の解放は黒人が自ら進んで進めなければならないことを明らかにした。BPPは黒人自身の手で進めなければならないことを明らかにした。

(3) 弾圧下における組織分裂傾向の促進

一九六七年の五月のサクラメント武装デモを機に、BPPの名は全国的に知られるようになった。アメリカの黒人コミュニティに脅威をおよぼすとともに、黒人にも大きな反響をあたえた。一九六七年五月から六月にかけて、一方六八年一月に合体した。

(a) 弾圧下における組織分裂傾向の促進

一九六七年の五月のサクラメント武装デモを機に、BPPの名は全国的に知られるようになった。アメリカの黒人コミュニティに脅威をおよぼすとともに、黒人にも大きな反響をあたえた。一九六七年五月から六月にかけて、一方六八年一月に合体した。

一九六七年の五月のサクラメント武装デモを機に、BPPの名は全国的に知られるようになった。アメリカの黒人コミュニティに脅威をおよぼすとともに、黒人にも大きな反響をあたえた。一九六七年五月から六月にかけて、一方六八年一月に合体した。

(b) 白人ラディカルの対応と共産党の介入

一九六七年の五月のサクラメント武装デモを機に、BPPの名は全国的に知られるようになった。アメリカの黒人コミュニティに脅威をおよぼすとともに、黒人にも大きな反響をあたえた。一九六七年五月から六月にかけて、一方六八年一月に合体した。

これを打倒するにどうしても必要な革命組織を築く仕事に乗り出していきよくなるだろうと、われわれは考えたのである。……だが、どうも若者が白人を恐れているように思われ、まるで奴隷捕縛人の手にかかると逃げまわらざるを得ない。……われわれの共闘は組織された黒人グループと組織された白人グループとの間で組織される種類のものである。……目下のところアメリカにおける奴隷所有者は白人集団だ。われわれはこの国の革命を通じて彼等とその地位から脱落せよという。……白人革命家の責務は、その点でわれわれを手助けすることだ。われわれが警察や軍隊から攻撃を受けるとき、人殺しを攻撃し、われわれと同じく反帝国主義を示し、われわれのプログラムに従って白人植民地主義のライオナルの務めをなす。……一九八〇年八月「ニュート」に語る。……

(c) 亡命したクリーパーの活動

一九六七年の五月のサクラメント武装デモを機に、BPPの名は全国的に知られるようになった。アメリカの黒人コミュニティに脅威をおよぼすとともに、黒人にも大きな反響をあたえた。一九六七年五月から六月にかけて、一方六八年一月に合体した。

(c) 亡命したクリーパーの活動

一九六七年の五月のサクラメント武装デモを機に、BPPの名は全国的に知られるようになった。アメリカの黒人コミュニティに脅威をおよぼすとともに、黒人にも大きな反響をあたえた。一九六七年五月から六月にかけて、一方六八年一月に合体した。

これを打倒するにどうしても必要な革命組織を築く仕事に乗り出していきよくなるだろうと、われわれは考えたのである。……だが、どうも若者が白人を恐れているように思われ、まるで奴隷捕縛人の手にかかると逃げまわらざるを得ない。……われわれの共闘は組織された黒人グループと組織された白人グループとの間で組織される種類のものである。……目下のところアメリカにおける奴隷所有者は白人集団だ。われわれはこの国の革命を通じて彼等とその地位から脱落せよという。……白人革命家の責務は、その点でわれわれを手助けすることだ。われわれが警察や軍隊から攻撃を受けるとき、人殺しを攻撃し、われわれと同じく反帝国主義を示し、われわれのプログラムに従って白人植民地主義のライオナルの務めをなす。……一九八〇年八月「ニュート」に語る。……

一九六七年の五月のサクラメント武装デモを機に、BPPの名は全国的に知られるようになった。アメリカの黒人コミュニティに脅威をおよぼすとともに、黒人にも大きな反響をあたえた。一九六七年五月から六月にかけて、一方六八年一月に合体した。

(c) 亡命したクリーパーの活動

一九六七年の五月のサクラメント武装デモを機に、BPPの名は全国的に知られるようになった。アメリカの黒人コミュニティに脅威をおよぼすとともに、黒人にも大きな反響をあたえた。一九六七年五月から六月にかけて、一方六八年一月に合体した。

七面へ続く

一九六七年の五月のサクラメント武装デモを機に、BPPの名は全国的に知られるようになった。アメリカの黒人コミュニティに脅威をおよぼすとともに、黒人にも大きな反響をあたえた。一九六七年五月から六月にかけて、一方六八年一月に合体した。

(c) 亡命したクリーパーの活動

一九六七年の五月のサクラメント武装デモを機に、BPPの名は全国的に知られるようになった。アメリカの黒人コミュニティに脅威をおよぼすとともに、黒人にも大きな反響をあたえた。一九六七年五月から六月にかけて、一方六八年一月に合体した。